

平成30年度 学校総合体育大会兼全国高校総体サッカー大会 埼玉県予選 大会総評
「昌平 大会3連覇達成・浦和南9年ぶり全国高校総体出場」

報告者：高体連技術委員 川口青陵高校 山田 純輝

6月9日から6月24日にかけて平成30年度学校総合体育大会兼全国高校総体サッカー大会埼玉県予選が開催された。本大会は、U18埼玉県リーグS1・S2の23校（Bチームの7チームは除く）と関東大会埼玉県予選で準優勝を飾った立教新座、そして各支部予選を勝ち上がった28校の計52校によるトーナメント方式で実施された。大会3連覇となった昌平が2018年初のタイトルを獲得、9年ぶりに全国高校総体出場となる浦和南が準優勝、成徳深谷と立教新座が3位という結果となった。

優勝した昌平は、新人大大会と関東大会予選でいずれもベスト8と苦しんでいたが、今大会は2回戦からの5試合で27得点3失点と攻守において他チームを圧倒し、王座奪還に成功した。1-4-2-3-1の布陣で、ショートパスとロングパスを併用するポゼッションスタイルは健在であった。DFとボランチでパス交換しながらFWの動き出しに合わせて背後や楔のボールを配給し、前線のコンビネーションを生かしてゴールへ迫った。ビルドアップ中にSHがインサイドにポジションを取り、空いたスペースにSBがオーバーラップするなど厚みのある攻撃を展開した。攻撃の中心は縦パスで攻撃のスイッチを入れることのできるボランチ⑧原田、ボランチやSHで起点となり、チームの得点源となった⑭木下。そして後半からの出場が主であったが、独特なボールタッチでのドリブルでチャンスを生み出したSH⑩須藤。その他、昨年から中心で活躍するFW⑪森田やトップ下⑨渋谷などタレントが揃う。今大会でミドルシュートでの得点が多く見られたのは、引いた相手にも得点するパターンの一つとなり好材料である。守備は、DF⑤関根を中心にコンパクトフィールドを形成し、FWが規制をかけながら連動した守備でサイドに運ばせて高い位置でボールを奪おうとする。バイタルエリアをケアすることで自由に縦パスを入れさせない。攻撃から守備への切り替えが早く、相手を自由にさせなかった。その中でもボランチ⑥丸山は常に相手の攻撃の芽を摘むことができるように予測、準備をしており、欠かせない存在であった。課題としては、相手のロングボールに対してDFとMFの間が空きバイタルエリアで自由を許しミドルシュートを許してしまったことが挙げられる。また、GKとDFの間のスペース管理にも不安を残すが、本大会までに改善を期待したい。

準優勝の浦和南は、堅守速攻のスタイルを一試合通して貫く粘り強いサッカーを展開し、9年ぶりとなる本大会出場を決めた。1-4-1-4-1の布陣で、DFからビルドアップし、FW⑫佐藤の動き出しに合わせてロングボールを配給して前線に起点を作り、中盤が素早く厚みのあるサポートをしながらゴールへと迫った。ロングボールだけではなく、SBが高い位置を取り、中盤3枚が良い距離間でテンポ良くパスをつなぎ、相手を中央に引き付けておきながらサイドに展開してサイド突破からクロスでチャンスを生み出すなど攻撃にもバリエーションがあった。攻撃の中心は、攻守において献身的に走り、身体

を張って起点となったFW⑫佐藤、武器である左足とテクニックで攻撃の中心となったOH⑩大坂、スピードと左足のクロスが持ち味のSH⑧草野。この3人が絡んだサイド攻撃や中央での関わりは迫力があり、相手に脅威を与えた。FW⑫佐藤のロングスローもチャンスを出した。守備は、全員でハードワークし、献身的であった。コンパクトフィールドで強固なブロックを形成し、相手の縦パスを許さず、ロングボールを確実に跳ね返した。特にCB④相馬は空中戦や対人が強くDFリーダーであった。DH⑥鹿又の献身的な守備も効いており、攻撃の芽を摘んだ。課題としては、攻撃時にFW⑫佐藤が孤立してしまうことや守備時に人は足りているものの奪いどころが不明確でバイタルエリアへの侵入を許してしまうことが挙げられるが、本大会までに改善したい。

3位の成徳深谷は、新人大会と関東大会予選に続く3冠とはならなかったが、強固な守備をベースにしながら前線からの積極的なプレッシングでボールを奪い、手数をかけずに相手ゴールに迫るスタイルは健在であった。1-4-4-2の布陣で、GKやDFからFW⑨戸澤をターゲットにロングボールを配給して起点を作り、素早く中盤がサポートしながら厚みのある攻撃でゴールに迫った。トップ下⑦竹間やSH⑧佐藤はテクニックやスピードに長け、個人で突破することもできるため脅威であった。CKのバリエーションの多さやDF⑤長谷のロングスローも魅力的で何度も相手ゴールを脅かした。守備は、コンパクトでインテンシティも高く、常に相手に圧力をかけ続けた。FWが規制をかけてSHが相手SBに迷わずプレスをかけて出所を限定してDFやDHでボールを奪い、ショートカウンターを狙った。特にCB④成澤は、DFリーダーでラインを統率し、球際の強さを発揮してロングボールを確実に跳ね返した。課題としては、昌平のような流動的にポジションを変化させながら攻撃してくるチームに対して守備のズレが生じてプレスが後手になってしまったことが挙げられる。

同じく3位の立教新座は、3バックや4バック、1トップや2トップなど相手や状況、時間帯に応じてシステムを使い分けながら柔軟な戦い方が特徴のチームである。DFからビルドアップしながらFWをターゲットにロングボールで前線に起点を作る形とSHを起点にドリブル突破やコンビネーションからチャンスを作る形が多く見られた。攻守の中心となるのは、ターゲットになることもでき個人突破もできる④南口。相手や流れによってFWやCBに入り、存在感を発揮した。守備は、全体的に集中力が高く、対人や空中戦に強い。DH⑥小岩を中心にセカンドボールに対する予測や準備も早く、相手に自由に攻撃させなかった。課題としては、FWやSHが孤立してしまい、簡単にボールを失ってしまうことが挙げられる。また、3バック時に外側のスペースを使われてしまうことも目立った。これらが改善されれば、相手にとってより嫌なチームになりそうである。

大会を通じて特徴的だったのは、どのチームもチャンスがあればDFからFWの動き出しに合わせてロングボールを供給し、前線で起点を作ろうとしていたことである。単にリスク回避のためにロングボールを選択するわけではなく、チーム戦術として徹底しているチームが多く見られた。そういった傾向もあつてか自陣での不用意なミスからの失点が少

なかったように感じる。その中でも、長短のパスを併用し、中央やサイド攻撃からバランス良く攻撃できていたのが優勝した昌平である。圧倒的な得点力で他を圧倒した。また、全体的にミドルシュートでの得点が増えていたことが特徴であった。引いた相手に対してロングレンジからのシュートは大きな得点源となるため、磨き続けたい。守備面では、チーム全体でのハードワークをベースに守備意識やインテンシティが高いチームが多く見られた。コンパクトフィールドで組織的なブロックを形成し、相手の縦パスやペナルティエリアへの侵入を許さなかった。しかし、全体的にボールの奪いどころが明確になっておらず、後手に回ることも多く見られた。今一度、チームとして奪いどころを共有していくことで、失点を減らすと共に、効果的な攻撃につなげることができると感じた。

優勝した昌平、準優勝の浦和南は8月7日から三重県で開催される全国高校総体に出場する。両チームともに県予選での成果と課題を整理して本大会に臨み、優勝という輝かしい成績を残すことを期待して総評とする。